「沖縄の木の文化を支える「首里城古事の森」について」

沖縄森林管理署　　池田勉　舟浮俊明　田中優哉
首里城古事の森育成協議会　事務局長　上原俊夫

【はじめに】

沖縄の木の文化

沖縄には、琉球王国時代から首里城をはじめ、フクギを屋敷林とする赤瓦屋根の家などの木造建築や琉球漆器などの伝統工芸品、さらには沖縄の伝統芸能を支える三線などにおいて、多様で豊かな温もりのある木の文化が育まれてきた。

しかし、近年、沖縄県内では戦前・戦後の乱伐、戦火による消失・病害虫の発生などにより、主要な建築材であるイヌマキをはじめとする有用木材資源の枯渇化が明らかになるとともに、沖縄県内の一般住宅のほとんどは鉄筋コンクリート化するなど、身近な木の文化が衰退しつつある。

沖縄の林業の歴史と現状

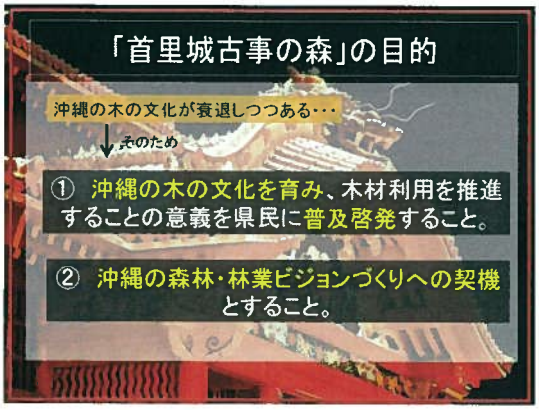
このような沖縄の木の文化が育まれた背景には、琉球王国時代（18 世紀初頭）からの林業の歴史が大きく関係する。琉球王国時代、首里城の修復をはじめとする木材利用の増加に伴う森林資源の劣化を回復するため、「林政七書（※1）」の通達により琉球林業の基礎が築かれた。また、ヤンバル（沖縄本島北部）は首里城や建物の修理、営繕に用いられる木材の供給と船の用材を確保する重要な場所であり、適地適木を基本として、皆伐一斉林ではなく天然林の除伐後の植栽による混交林造成、その後の下種更新もできるようにすべきであることが指導されていた。

（※1・・・「林政七書」が蔡温（1682～1761）により定められ、その後林政の一書が追加され「林政八書」となった。内容は造林地・林相の見方、苗木育成・造林・山林保護方法、藩有林の計画、森林の取締罰則等の森林管理に関するものとなっている。）

とくに、イヌマキは首里城正殿をはじめとする歴史的建造物等の建築・修復用の最重要樹種として、厳しく管理されていたが、戦前・戦後の乱伐、戦火による消失や病害虫の発生、林業の衰退により現今のイヌマキ資源は極めて少なく、首里城復元に際しても移入材や代替材に頼らざるを得ないなど、将来に向けた資源育成が必要とされている。

目的

このため、琉球の木の文化や森林・林業を振り返るとともに、再生可能な資源である木材の利用推進などについて議論し、沖縄の森林・林業ビジョンづくりへの契機とするため、琉球の木の文化の象徴である首里城でのシンポジウムを行った。また、沖縄北部国有林に、将来の首里城修復に用いる木材を育てる森づくりを行い、併せて、琉球木に伝わる木の文化、森林・林業について理解を深める森林環境教育の場を提供することを目的として「首里城古事の森」づくりを行った。



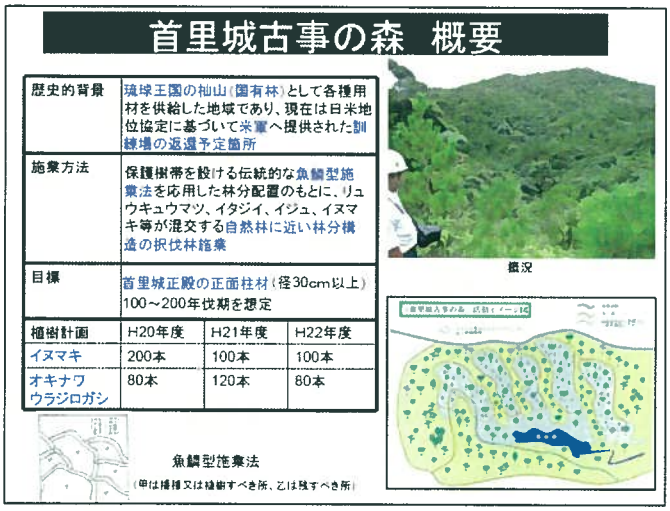
（※2・・・「古事の森」とは、木の文化を支える森づくりの一環として、作家の立松和平氏が提唱したもので、重要文化財等に指定されている神社仏閣などの木造建築物の修復用資材の確保に資するため、林野庁が平成 14 年度から、関係機関やNPOと連携し、200～400 年の超長期の森林づく

りの象徴的取り組みとして実施している。今回の「首里城古事の森づくり」は第1回「京都古事の森づくり」から9番目となる。）

【首里城古事の森の取り組み】

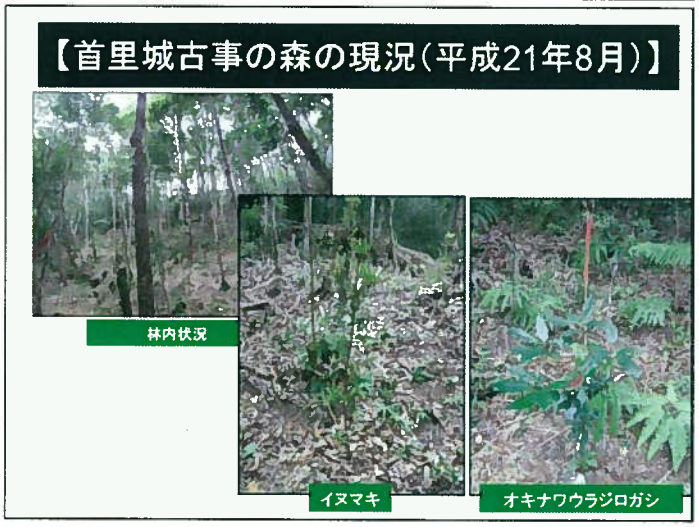
概要

所在地	沖縄県国頭村　安波国有林35林班に小班内		
計画面積	2.49ha		
地況	・標高　約200～220m　　・南～南西向き　　・平均傾斜14～23度 ・土壌　名護層砂岩を母材とするYc型土壌（弱乾性黄色土）		
林況	昭和44年にリュウキュウマツが播種により植栽されたが、手入れの遅れにより天然広葉樹と混交林化し、イヌマキの自生立木、稚樹も比較的多く見られる林分となっている。平成16年には除伐を行い有用樹種の広葉樹を残存させてあり、路網密度は周囲を取り囲む作業路及び舗装道路を含め約150m/haとなっている。		
歴史的背景	かつて琉球王国の杣山（当時の国有林野）として各種用材を供給した地域であり、現在は日米地位協定に基づいて米軍へ提供された訓練場の返還予定箇所である。		
施業方法	保護樹帯を設ける伝統的な魚鱗型施業法を応用した林分配置のもとに、リュウキュウマツ、イタジイ、イジュ、モッコク、イヌマキ等が混交する自然林に近い林分構造の択伐林施業。		
目標	首里城正殿の正面柱材（径30cm以上）、100～200年伐期		
植樹計画	平成20年度（H20.11.30）	平成21年度（H21.11.1）	平成22年度（未定）
イヌマキ	200本	100本	100本
オキナワウラジロガシ	80本	120本	80本



取り組み内容

「首里城古事の森」における森林づくりを円滑かつ効果的に実施するために必要な森林施業等を検討するために平成 19 年に「琉球木の文化を支える森づくり」検討委員会を設置した。委員会による検討後、平成 20 年 3 月に「首里城古事の森育成協議会」を結成し、平成 20 年 11 月 29 日、首里城公園にて「古事の森」提案者の立松和平氏らを招き首里城でシンポジウムを行い、翌日 11 月 30 日に国頭村の安田小学校児童と地元関係者および林野庁長官・九州森林管理局長などの林野庁関係者等により首里城古事の森にイヌマキおよびウラジロガシの植樹を行った。



首里城古事の森における重要な課題

大径材生産を目的に行う長伐期のイヌマキ林分の施業においては、沖縄県で連年発生するキオビエダシャク被害への対応が重要な課題である。沖縄県での防除法としてはこれまでに主に薬剤散布が行われてきたが、「首里城古事の森」は希少動植物の宝庫であるヤンバルにあり、またダムの集水域であることから、自然環境の保全に配慮しできるだけ薬剤による化学的防除をさけ、捕殺、ネット法、ネズミ返し法、粘着テープや蛹化トラップの活用などの物理的手法をとることとし、自然の持つ生態的バランスを維持することによって、被害の蔓延防止に努めている。植樹後から現在までの病害虫（キオビエダシャク・カイガラムシ）の発生状況は表1のとおりである。

表1　平成 21 年　首里城古事の森（イヌマキ及びオキナワウラジロカシ）被害等調査記録　　（高江森林官）

年月日	イヌマキ(200 本)		オキナワウラジロカシ（80 本）		備　　考
	枯れ	ｷｵﾋﾞｴﾀﾞｼｬｸ	枯れ	その他	
5.13	0	0	1		
5.25	0	0			
6.8	0	0	1		
6.22	0	8			
6.24	0	7		1(猪による抜き取り)	
7.07	0	0			
7.8	0	2			カイガラムシ駆除剤散布 (クミアイタッチオイル)600ml/60L
7.14	0	4	1		カイガラムシ駆除剤散布 (クミアイタッチオイル)600ml/60L
7.21	0	1	2		カイガラムシ駆除剤散布 (クミアイタッチオイル)600ml/60L

【今後の予定】

平成 21 年 11 月 1 日には、イヌマキ 100 本・オキナワウラジロガシ 120 本を地元小学校児童らと追加植栽の予定である。

イヌマキについては、自生稚樹を育成するとともに、ha 当たりの成立本数が 200 本程度となるように補植を行い、周辺の受光伐、除間伐、坪下刈、施肥、枝打等の保育作業を続ける。

また、「首里城古事の森」での作業は、イヌマキ資源の育成のみならず、林業関係者を始めとする広く国民や県民に森林・林業、木材利用の意義をPRする展示林としての効果を期待し、森林環境教育や老若男女のボランティアによる作業も想定している。そのため、林内歩道の適正配置・林内作業の安全確保・林内景観の保持に十分な配慮が必要であり、今後もより環境に優しい森林づくりを推進する考えである。